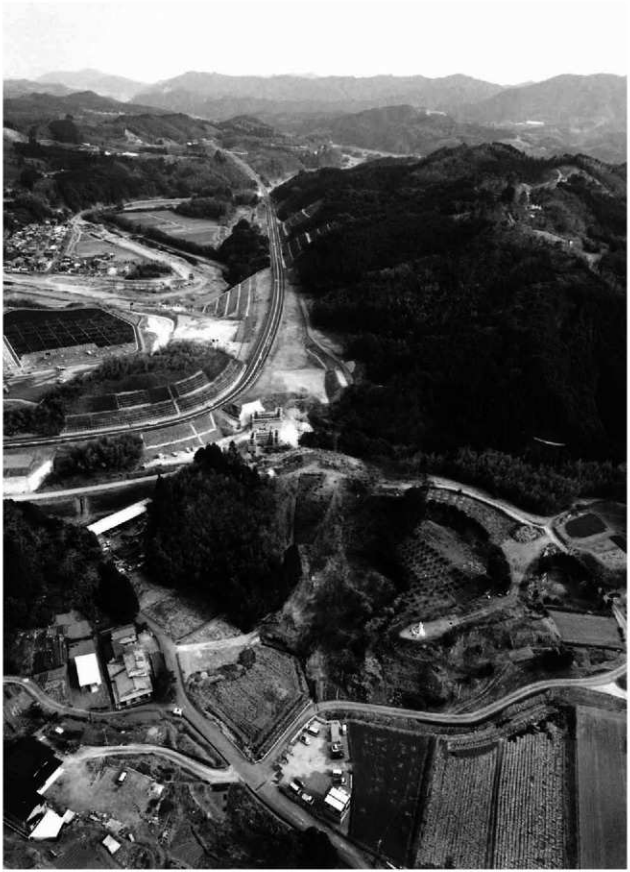
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第２０６集

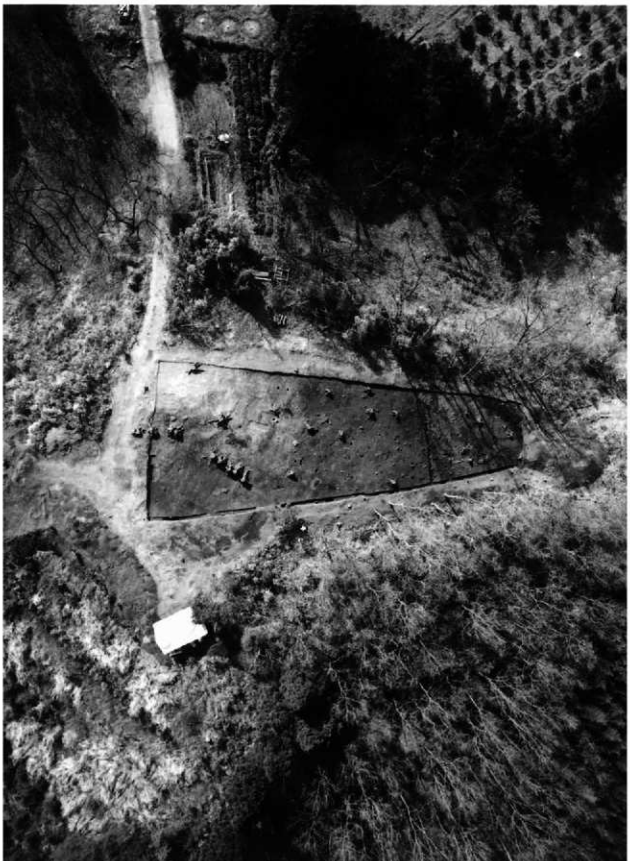
南久保山小堀町遺跡

一般国道２１８号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

２０１１
宮崎県埋蔵文化財センター



調査区遠景



調査区全景

序

宮崎県教育委員会では、平成２１年度に一般国道２１８号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した南久保山小堀町遺跡では、貝殻等で施紋された土器や穿孔のある土器をはじめとする縄文時代の土器や、集石遺構や焼土を伴う土坑などの遺構を確認することができました。これらの遺物や遺構は当該期の人々が確かにこの地で暮らしたことを教えてくれます。また、ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成２３年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　森　隆茂

例　　言

1　本書は平成２１年度一般国道２１８号北方延岡道路建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県延岡市北方町の南久保山小堀町遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は平成２２年１月５日から平成２２年３月１９日まで行った。

4　現地での実測・写真撮影などの記録は、川越宏之、森田利枝、二宮満夫が発掘作業員の協力を得て作成した。なお、空中写真撮影は有限会社スカイサーベイ九州、基準杭設置は（株）エースコンサルタントに委託した。

5　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・実測・トレースは川越が整理作業員の協力を得て行った。なお、石器の石材同定の一部については県総合博物館 赤崎広志氏に教示を得、当センター松本茂の協力を得た。

6　本書で使用した第１図「周辺遺跡分布図」および第２図「北方延岡道路関連発掘遺跡位置図」は国土地理院発行の５万分の１図、第４図「周辺地形図」は国土地理院の承認助言を得て北方町役場が作成した２千５百分の１図を使用した。

7　本書で使用した土層断面図及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。

8　本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）で、レベルの表示は海抜絶対高である。

9　本書で使用した遺構の略号は次の通りである。
　　ＳＣ・・・・土坑　　ＳＩ・・・・集石遺構

10　挿図のうち、遺物の縮小率は原図の 67％、50％、33％であり、図中に２／３、１／２、１／３と表記している。

11　本書の執筆は第１章第１節を文化財課堀田孝博が、その他の執筆・編集を川越宏之が行った。

12　出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1
第３節　遺跡の位置と環境 …… 2
　１．地理的環境 …… 2
　２．歴史的環境 …… 3
第Ⅱ章　調査の概要
　第１節　調査の経過 …… 9
　第２節　基本層序 …… 10
第Ⅲ章　調査の記録
　第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
　　１．遺構 …… 13
　　２．遺物 …… 19
　第２節　その他の時代の遺物 …… 26
第Ⅳ章　総括 …… 27

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 4
第２図　北方延岡道路関連発掘遺跡位置図 …… 7
第３図　基本層序図 …… 10
第４図　周辺地形図（Ｓ＝１／５，０００） …… 11
第５図　遺構配置図（Ｓ＝１／３００） …… 12
第６図　散礫分布図（Ｓ＝１／４００） …… 13
第７図　集石遺構実測図１（Ｓ＝１／２０） …… 14
第８図　集石遺構実測図２（Ｓ＝１／２０） …… 15
第９図　土坑実測図（Ｓ＝１／２０） …… 18
第10図　土器出土位置図（Ｓ＝１／４００） …… 19
第11図　土器実測図（Ｓ＝２／３） …… 20
第12図　石器出土位置図（Ｓ＝１／４００） …… 22
第13図　石器実測図１（Ｓ＝１／３） …… 24
第14図　石器実測図２（Ｓ＝１／３、１／２） …… 25

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧 …… 5
第２表　北方延岡道路関連発掘遺跡一覧 …… 7
第３表　集石遺構観察表 …… 14
第４表　土坑観察表 …… 17
第５表　土器観察表 …… 21
第６表　石器観察表 …… 23

図　版　目　次

巻頭１　調査区遠景 …… 巻頭１
巻頭２　調査区全景 …… 巻頭２
図版１　第１トレンチ西側壁土層断面　第２トレンチ西側壁土層断面　第３トレンチ西側壁土層断面
　　調査区全景（東より） …… 30
図版２　１号集石遺構　２号集石遺構　３集石遺構 …… 31
図版３　４号集石遺構　５号集石遺構　６号集石遺構 …… 32
図版４　A区散礫検出状況　C区散礫検出状況　A区散礫と集石遺構 …… 33
図版５　１号土坑断面　３号土坑完掘　２号土坑半裁　２号土坑完掘　４号土坑半裁
　　４号土坑完掘 …… 34
図版６　出土土器 …… 35
図版７　出土石器 …… 36

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

一般国道218号北方延岡道路は、現一般国道218号に並行して、延岡市北方町蔵田から延岡市天下町までを結ぶ延長13.1kmの高規格幹線道路であり、建設省九州地方整備局延岡工事事務所（現国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所）が平成８（1996）年度に事業化し、平成13（2001）年度より工事着手している。

同事業は１～３工区に分割して延岡側から順次実施されているが、路線内における埋蔵文化財に関する協議を継続中であり、必要に応じて発掘調査等を実施してきた。このうち３工区（舞野～延岡、延長2.1km）が平成18（2006）年２月18日に、２工区（北方～舞野、延長6.4km）が平成20（2008）年４月26日に供用開始となり、残る１工区（蔵田～北方、延長4.6km）については同年３月に実施した分布調査の結果に基づき、路線内の15箇所を対象として協議を重ねている。

南久保山小堀町遺跡は3,060㎡を対象として平成21（2009）年６月４・５日、７月17日に確認調査を実施し、うち2,060㎡について埋蔵文化財が影響を受けると判断した。その取扱いについて協議したところ、同年度内に1,000㎡の本発掘調査を実施することで合意したため、同年12月２日付で発掘調査委託契約を締結した。調査は宮崎県埋蔵文化財センターが平成22年１月５日から平成22（2010）年３月19日まで実施したが、この調査と並行して３月12日に残る1,060㎡についての追加確認調査を行ったところ、予想以上に削平の影響が大きく、次年度の本発掘調査は不要と判断した。

第２節　調査の組織

南久保山小堀町遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は下記の組織で実施した。

調査主体　宮崎県教育委員会

調査機関　宮崎県埋蔵文化財センター

平成２１年度　発掘調査

所　　長	福永　展幸
副所長兼総務課長	長友　英詞
総務課総務担当リーダー・主幹	高山　正信
調査第二課長	石川　悦雄
調査第四担当リーダー・主幹	近藤　　協
調査第四担当主査（調査担当）	川越　宏之
調査第四担当主任主事（調査担当）	二宮　満夫
調査第四担当主事（調査担当）	森田　利枝

平成２２年度　整理作業

所　　長	森　　隆茂
副所長	北郷　泰道
総務課長	矢野　雅紀
調査第二課長	永友　良典
調査第四担当リーダー・副主幹	大村公美恵
調査第四担当主査（報告書担当）	川越　宏之

事業調整

宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当主任主事	堀田　孝博

第３節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

地理的条件は人々の生活に大きな影響を与える。開発行為により地形が改変されると、もとの地形・土壌の状態を知ることは困難となる。旧地形から得られる情報は、遺跡立地など人々の昔からの土地利用を知る手がかりとなるだけでなく、土地の高低・地盤の安定性など今を生きる私たちにとっても欠かせない。ここでは本遺跡及び周辺遺跡に特に関係が深いと思われる項目について簡単に述べる。

自然地形

五ヶ瀬川は水量豊富、水質清澄な河川で、流域に暮らす人々は今も昔もこの川から大きな恩恵を受けている。五ヶ瀬川の源は熊本県との県境にそびえる向坂山（標高 1,684m）で、幹川流路延長 106km、流域面積 1,820 ㎢の一級河川である。年間を通して水量が豊富なため、農業・工業・発電・上水道に安定的に利用されている。また、中上流域は広範囲にわたり自然公園に指定され、中下流には鮎の産卵・生息に適した瀬・淵が多く、観光客や釣り人を引き寄せる観光資源でもある。

河川は浸食・運搬・堆積作用により地形を改変する。本遺跡周辺は五ヶ瀬川の中流と下流の境界付近にあたり、地形が山地から平野へ移り変わる場所である。地形の傾斜がゆるやかになり、それにともなって河川の運搬力も弱まる。ここで河道が大きく北に湾曲していることも運搬力を弱めている一因である。川水流付近の河川敷には河川が運搬できなくなった小石が大量に堆積している。この付近では 15 種類以上の石材がみられる。ここで縄文人は目的の石を採集したことだろう。

気候

気温は温暖で五ヶ瀬川最上流部でも最寒月平均気温が氷点下になることはない。

宮崎県は九州山地の東側に位置するために、温帯低気圧や台風がもたらす水分をたっぷり含んだ大気が南東から脊梁山地をかけのぼり多量の雨を降らせる。これが五ヶ瀬川の豊かな流れを生み出す。雨水は地下にも蓄えられ、長い時間をかけて地表にしみ出し、谷の上流部にみられる井戸やため池の水源となる。流域の年間降水量は約 2,500mm で日本の平均の 1,800mm を大きく上回る。月別では６～９月に最も多い。梅雨と台風で大量の雨が降り、それが一気に山肌を駆け下りると水害を引き起こす。

地質ほか

五ヶ瀬川の水系は、北は祖母・傾山系、西は九州山地、南は諸塚山系に囲まれている。これらの山系は 900 ～ 1,700m 以上といずれも急峻で起伏が大きい。祖母傾国定公園の大崩山系は火山活動によって地下に形成された花崗斑岩の大岩脈が隆起した後侵食されて形成された。景観が美しいことと岩肌がロッククライミングに好適なために多くの登山客、観光客が訪れる。

山地の起伏は本遺跡周辺を境に東側の中下流域ではゆるやかになり、なだらかな丘陵とその間の谷間に水田が広がる景観となる。宮崎県北西部の地質構造は、水平な堆積層が地殻変動により回転し帯状に露出した構造を呈し、北西ほど古く南東ほど新しい層である。堅硬・緻密なチャートなどの石材は上流で生産されたものと考えられる。本遺跡周辺には諸塚層群（四万十累層群）とよばれる、主として硬質な砂岩や頁岩より構成される層が分布する。また、五ヶ瀬川流域には９万年前の阿蘇山の噴火の際に流出した阿蘇火砕流が厚く堆積し、地元ではこれを灰石と呼び墓石などに利用している。灰石は地質が脆弱で治水のためのダム建設を困難にしている。

2　歴史的環境

遺跡の位置する延岡市には多くの遺跡が分布している。

延岡市内における文化財調査の歴史は古く、江戸時代の延岡藩主内藤政韶（1776 年～ 1802 年）にはじまる。彼は居宅である西の丸（現内藤記念館）から採集した土器をきっかけに、大貫町浄土寺山の古墳（現国指定南方古墳群第 24 号墳）などの調査を行い、「集古標目」「集古採覧」（戦争により焼失）として記録を残している。明治維新前後に活躍した延岡藩家老原時行は、延岡周辺の考古資料を収集し、その中には吉野町出土とされる石剣がある。その後、彼の影響を受けた有馬七蔵は、小学校の代用教員時代に天下町字今井野（延岡植物園周辺）で縄文から古墳時代にかけての遺物を多数収集し有馬コレクションとして学会に広く知られるようになったが、戦災により全て焼失している。大正から昭和初期にかけては、東京大学講師鳥居龍蔵による南方古墳群、延岡古墳群の発掘調査が実施されている。調査は大正 14 年 10 月から昭和 4 年 7 月にかけて、延べ 3 回にわたり浄土寺山古墳をはじめとする市内で主要な古墳が調査され、その成果は「上代の日向延岡」として出版され、現在でも重要な文献となっている。戦後の宮崎県における考古学研究は、石川恒太郎（宮崎県文化財保護審議会委員）の功績によるものが大きく、市内でも苅田窯跡、貝の畑遺跡など数多く調査され、「宮崎県の考古学」「延岡市史」などに紹介されている。

旧石器時代

矢野原遺跡、岩土原遺跡、蔵田遺跡、畑山遺跡、笠下遺跡、赤木遺跡、吉野遺跡等、姶良Ｔｎ火山灰層（以下ＡＴ）下位で石器群の確認例がある。ＡＴ上位の石器群としては、切出形ナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群と細石器を中心とする一群の２つの文化層が確認されている赤木遺跡をはじめ、ナイフ形石器や剥片尖頭器、細石器などが出土している笠下遺跡等、林遺跡や黒土田遺跡、地蔵ヶ森遺跡、吉野遺跡、下曽木慈眼寺霊園遺跡、片田遺跡等がある。岩土原遺跡では、半船底型細石核と隆帯上に爪形文を施した土器が共伴して出土している。

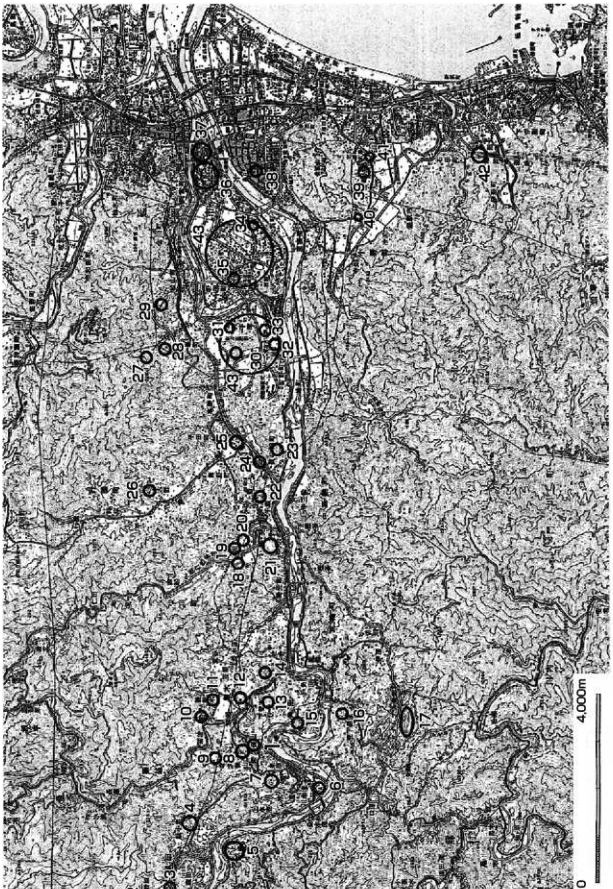
南久保山小堀町遺跡周辺では東原遺跡内の切り通しアカホヤ層下の黒褐色土層から流紋岩製の石核が出土しているが、平成 21 年度の延岡市教育委員会の調査でも剥片が出土している。同年調査の北久保山遺跡からは細石核や剥片尖頭器が出土している。

北方延岡道路関連の遺跡として平成 18 年度に調査された黒仁田遺跡ではＡＴの上位から狸谷型のナイフ形石器や剥片尖頭器を含む 70 数点からなる石器群、更にその上層から細石刃石器群が確認された。特に細石刃石器文化層では複数の石器ブロックが確認されており石器製作作業場としての可能性が報告されている。

縄文時代

矢野原遺跡、地蔵ヶ森遺跡、山田遺跡等がある。地蔵ヶ森遺跡では、押型文土器と塞ノ神式土器の時期の集石遺構 8 基が確認されている。また、山田遺跡では、集石遺構や炉穴群、陥し穴状遺構、円形配石遺構などが確認され、集落構成の理解ができる事例の一つである。また、沖田川流域で沖田貝塚や片田貝塚、五ヶ瀬川流域に大貫貝塚が分布している。

南久保山小堀町遺跡周辺では東原遺跡が知られており、石鏃や押型文土器、磨製石斧等が採集されていたが、平成 21 年度の延岡市教育委員会の調査で押型文土器やチャート製の石鏃が出土している。同年調査の北久保山遺跡では晩期粗製深鉢の胴部片が確認されている。また、十郎ヶ尾遺跡では切り通し



第１図　周辺遺跡分布図(S=1／80,000)

第１表　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	南久保山小堀町遺跡	延岡市北方町子南久保山	散布地	縄文～近世
2	矢野原遺跡	延岡市北方町辰蔵田	集落跡	旧石器～近世
3	蔵田遺跡	延岡市北方町辰蔵田	集落跡	旧石器～近世
4	駄小屋遺跡	延岡市北方町辰蔵田	散布地	縄文～近世
5	上崎遺跡	延岡市北方町辰上埼	集落跡	旧石器～近世
6	川水流遺跡	延岡市北方町卯川水流	集落跡	旧石器～近世
7	東原遺跡	延岡市北方町卯川水流	散布地	旧石器～近世
8	十郎ヶ尾遺跡	延岡市北方町子南久保山	散布地	縄文～近世
9	北久保山遺跡	延岡市北方町子北久保山	散布地	縄文～近世
10	中畑遺跡	延岡市北方町子獺越	散布地	縄文～近世
11	年の神石棺	延岡市北方町子曽木	石棺群	古墳
12	後曽木遺跡	延岡市北方町子曽木	散布地・石棺群	古墳
13	曽木原遺跡	延岡市北方町子曽木	散布地	旧石器～近世
14	黒仁田遺跡	延岡市北方町子曽木	散布地	縄文～近世
15	足鍋遺跡	延岡市北方町丑角田	散布地	縄文～近世
16	岩土原遺跡	延岡市北方町寅笠下	散布地	旧石器～近世
17	笠下遺跡	延岡市北方町寅笠下	集落跡	旧石器～近世
18	山口遺跡（第２地点）	延岡市小川町字山口	集落跡	古墳～中世
19	山田遺跡	延岡市小川町字山田	散布地	旧石器・縄文・古墳
20	畑山遺跡	延岡市小川町字山田	集落跡	旧石器～近世
21	中尾原遺跡	延岡市細見町字細見	集落跡	旧石器～古墳
22	黒土田遺跡	延岡市細見町字黒土田・千葉	集落跡	旧石器～古墳
23	貝ノ畑遺跡	延岡市貝の畑町字貝ノ畑	散布地	縄文・古墳
24	多々羅第２遺跡	延岡市舞野町字多々羅	石棺・散布地	旧石器～古墳
25	赤木遺跡	延岡市舞野町字赤木・眞藤	散布地	旧石器・古墳
26	苅田窯跡	延岡市行縢町字諏訪・吉野	窯跡	古墳・古代
27	小峰窯跡	延岡市小峰町字内山	窯跡	近世
28	地蔵ヶ森遺跡	延岡市小峯町字後田ほか	集落跡	旧石器～弥生
29	野門遺跡	延岡市松山町字野門	散布地	縄文・古墳
30	今井野第２遺跡	延岡市天下町字今井野ほか	散布地	旧石器～古代
31	天下城山遺跡	延岡市天下町字雨下中須ほか	城跡	中世
32	吉野第１遺跡	延岡市吉野町字吉野ほか	散布地	旧石器～古代
33	吉野第２遺跡	延岡市吉野町字吉野ほか	寺跡・散布地	旧石器～弥生・中世
34	大貫貝塚	延岡市高野町字平・浄土寺	貝塚	縄文
35	野田町八田遺跡	延岡市野田町字八田	集落跡	縄文～古墳
36	延岡城内遺跡	延岡市本小路、東本小路ほか	城跡	中世・近世
37	延岡城下町遺跡	延岡市北町、中町、南町ほか	集落跡	弥生・近世
38	恒富本村遺跡	延岡市恒富町１丁目ほか	集落跡	弥生～近世
39	片田遺跡	延岡市片田町字狩迫・片田ほか	散布地	旧石器・縄文・古墳
40	沖田貝塚	延岡市小野町字横谷	貝塚	縄文
41	片田貝塚	延岡市片田町字片田	貝塚	縄文
42	林遺跡	延岡市伊形町字林ほか	散布地	旧石器・古墳・中世・近世
43	南方古墳群	延岡市天下町・吉野町・大貫町ほか	古墳	古墳

のアカホヤ層下で集石遺構が検出されている。足鍋遺跡では西平系の土器と多量の石錐が表採されている。散布地として下曽木遺跡がある。

北方延岡道路関連の遺跡として平成18年度に調査された黒仁田遺跡では弥生時代終末から古墳時代後期にかけての住居跡12軒が検出された。

弥生時代～古墳時代

集落遺跡としては弥生時代後期末から古墳時代後期では、中尾原遺跡をはじめ、蔵田遺跡、畑山遺跡、地蔵ヶ森遺跡、山口遺跡第２地点、林遺跡、野田町八田遺跡等、集落の確認例が増加する。そのうち山口遺跡第２地点では細見川左岸の微高地上に弥生時代後期から古墳時代中後期の住居跡が約３０軒確認されており、６４軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑等、大規模集落が確認されている中尾原遺跡や竪穴住居跡６軒のうち１軒から小鍛冶跡と考えられる遺構が確認されている畑山遺跡と、同流域上に展開するこれらの遺跡間の関連性が注目される。蔵田遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡が１軒確認され、その一角から磨製石鏃の未製品が４５個程確認され、工房の可能性が指摘されている。

墳墓では、多々羅遺跡で箱式石棺墓が確認されている。また、南方古墳群をはじめ北方村古墳、延岡古墳群等、数多くの古墳があり、国指定・県指定史跡になっている。

南久保山小堀町遺跡周辺の弥生時代遺跡としては川水流遺跡や東原遺跡から石庖丁が発見されている。また、古墳時代の遺跡では後曽木古墳と年の神石棺群があり、いずれも凝灰岩製の箱式石棺が発見されている。また、東原遺跡では平成21年度の延岡市教育委員会の調査で前期の住居跡が１軒検出されている。

古代～中世

苺田窯跡があり、９世紀から10世紀前半にかけて須恵器が生産されている。また、十数軒の掘立柱建物跡や土坑が確認されている畑山遺跡や大型掘立柱建物跡群や土坑墓、五輪塔等の確認された林遺跡等がある。

南久保山小堀町遺跡周辺では足鍋遺跡から土錘が発見されている。

近世

延岡城（延岡城内遺跡）や城下町（延岡城下町遺跡）、窯跡（小峰窯跡）等が確認されている。延岡城については、初代延岡藩主高橋元種が松尾城から中州内の丘陵地に築城したもので、この時に城下町の整備にも着手している。やがて高橋氏から有馬氏、三浦氏、牧野氏を経て、内藤氏の藩政に至り、安定期を迎えることとなる。

南久保山小堀町遺跡では、今回の調査区から200ｍほど南西の谷部で、平成３年度に農業基盤総合整備事業に伴う発掘調査が北方町教育委員会により行われている。当時の調査では古墳時代前期の竪穴住居跡１軒と中世の祭祀遺構４基のほか焼土集中部が検出された。住居の南側の柱穴間に土坑と焼土があり中央部に被熱した花崗岩製の巨礫が置かれていた。祭祀遺構内には円礫や円盤状の土製品、古銭や小砂利が寄せられていた。縄文時代の遺構は検出されなかったが、押型文土器や突帯文土器、石鏃や縄文晩期の打製石斧が多く出土している。

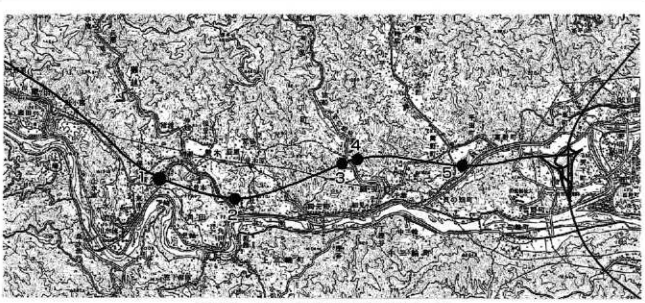
北方延岡道路事業関連の発掘調査は２工区、３工区の区間について平成１４年度から実施しており、山田遺跡、山口遺跡第２地点、野門遺跡、赤木遺跡第８地点の４遺跡の発掘調査を行っている。山田遺跡は主に旧石器時代や縄文時代早期の遺構や遺物が、山口遺跡第２地点は弥生時代後期から古墳時代中後期にかけての集落跡が、野門遺跡は縄文時代から古代にかけての幅広い時代の遺構・遺物が、赤木遺跡第８地点はＡＴを挟む上下位において、旧石器時代の遺構・遺物が検出された。

１工区については今回の南久保山小堀町遺跡が最初の発掘調査で、22 年度は北側丘陵の十郎ヶ尾遺跡の調査を行っている。

また、北方延岡道路と接続する国道 10 号延岡道路（北川町～延岡市）の全長 20.6km は平成６年度から事業に着手したが、埋蔵文化財の発掘調査は平成９年度から 15 年度までの７年間にわたって行われた。延岡道路関連の遺跡については林遺跡、吉野第２遺跡、今井野第２遺跡、天下城山遺跡の４遺跡の発掘調査を行っている。林遺跡は、平成９年～ 12 年度の４か年調査を行い、吉野第２遺跡は、平成 12・13・15 年度に調査を行った。ともに旧石器時代から近世にかけての幅広い時代の遺構・遺物が検出されている。天下城山遺跡は中世山城に関連する遺構・遺物が検出された。

第２表　北方延岡道路関連発掘遺跡一覧

	遺跡名	時代	調査年度									本調査の期間
			14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1	南久保山小堀町遺跡	縄文								本調査	報告書刊行	平 22. 1. 5　～ 平 22.3.19
2	黒仁田遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳					本調査			報告書刊行		平 18.5.8　～ 平 18.12.8
3	山口遺跡第２地点	弥生・古墳	本調査			報告書刊行						平 14.4.30　～ 平 14.8.1 平 14.10.30　～ 平 14.11.13
4	山田遺跡	旧石器・縄文	本調査	本調査	本調査			報告書刊行				平 14.9.25　～ 平 15.3.27 平 15.5.8　～ 平 15.10.7 平 15.10.28　～ 平 16.3.26 平 16.5.14　～ 平 16.7.28
5	赤木遺跡第８地点	旧石器		本調査（一次）	本調査（二次）	本調査（三次）	二次調査報告書刊行	三次調査報告書刊行	一次調査報告書刊行			平 15.10.28　～ 平 16.3.26 平 16.6.14　～ 平 16.12.15 平 17.12.12　～ 平 18.3.27



第２図　北方延岡道路関連発掘遺跡位置図

【参考文献】

北方町史編纂委員会 1972「北方町史」北方町

北方町教育委員会 1990「笠下遺跡」『北方町文化財報告書第 1 集』

北方町教育委員会 1992「南久保山小堀町遺跡」『北方町文化財報告書第 5 集』

北方町教育委員会 2004「町内遺跡詳細分布調査報告書」『北方町文化財報告書第 23 集』

北方町教育委員会 2006「北方町内遺跡 6」『北方町文化財報告書第 27 集』

沢皇臣「東臼杵郡北方町出土の弥生土器」『宮崎考古』第 1 号　宮崎考古学会

鈴木重治 1973「宮崎県岩土原遺跡の調査―土器伴出石器文化の一例―」『石器時代』第 10 号 石器時代文化研究会

田中茂 1962『東臼杵郡　北方村の古墳』北方村教育委員会

延岡市教育委員会 1978「野田八田遺跡」

延岡市教育委員会 1987「延岡市の歴史的環境　赤木遺跡　多々良遺跡」『延岡市文化財調査報告書第 3 集』

延岡市教育委員会 1991「上南方地区遺跡　中尾原遺跡　山口遺跡」『延岡市文化財調査報告書第 6 集』

延岡市教育委員会 1992「差木野遺跡」『延岡市文化財調査報告書第 9 集』

延岡市教育委員会 1992「上南方地区遺跡　中尾原遺跡　畑田遺跡」『延岡市文化財調査報告書第 8 集』

延岡市教育委員会 1996「市内遺跡詳細分布調査報告書」『延岡市文化財調査報告書第 16 集』

延岡市教育委員会 2001「吉野遺跡（第 4 次）　吉野遺跡（第 6 次）　延岡古墳群第 16 号墳　多々良第 1 遺跡　新宮遺跡　吉野遺跡（第 7 次）」『延岡市文化財調査報告書第 24 集』

延岡市教育委員会 2002「延岡城内遺跡Ⅰ」『延岡市文化財調査報告書第 26 集』

延岡市教育委員会 2007「市内遺跡　吉野遺跡（第 8 次）」『延岡市文化財調査報告書第 34 集』

延岡市教育委員会 2008「市内遺跡　曽木原遺跡（3 次・5 次）」『延岡市文化財調査報告書第 35 集』

延岡市教育委員会 2008「上崎地区遺跡」『延岡市文化財調査報告書第 36 集』

延岡市教育委員会 2010「東原遺跡（第 7 次）北久保山遺跡（第 2 次）」『延岡市文化財調査報告書第 41 集』

宮崎県 1989「宮崎県史」 資料編　考古Ⅰ

宮崎県教育委員会　「延岡市苅田窯遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第 9 集』

宮崎県教育委員会 1995「打扇遺跡 早日渡遺跡 矢野原遺跡 蔵田遺跡」『一般国道 218 号椎畑バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

宮崎県教育委員会 1988「地蔵ヶ森遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第 31 集』

宮崎県教育委員会 1990「林遺跡」『一般国道 10 号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書』

宮崎県埋蔵文化財センター 2005「山口遺跡第 2 地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 99 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2006「今井野第 2 遺跡　天下城山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 135 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2006「野門遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 136 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「赤木遺跡第 8 地点（第二次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 145 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 146 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「吉野第 2 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 155 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「赤木遺跡第 8 地点（第三次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 166 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2008「林遺跡Ⅱ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 174 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2009「黒仁田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 181 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2009「赤木遺跡第 8 地点（第一次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 182 集』

横山邦継 1973「石庖丁出土地名表（宮崎県）」『速見考古』第 4 号　九州先史研究会

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の経過

遺跡周辺ではこれまでに旧北方町が行った南久保山小堀町遺跡や田中茂氏が昭和32年に行った年の神石棺群（旧柩野石棺群）等があり、主に旧石器時代から中世にかけて遺構や遺物が確認されている。これらのことから、旧石器時代から中世にかけての時期のものが確認される可能性が想定された。

調査に入るにあたり、調査対象区全体を覆う、10ｍ×10ｍを１単位としたグリッドを設定し、南北方向に整数（北より１．２．３…）、東西方向にアルファベット（西よりＡ．Ｂ．Ｃ…）を付し、これを組み合わせて、グリッド番号（例：Ａ１グリッド等）とした。これらは調査区設定後、グリッドに合わせて杭を設置し、包含層の掘り下げや遺物の取り上げ、図面作成等に使用した。さらに地区割りについては、調査区北西部の散礫・集石遺構集中区をＡ区、東部の散礫集中区をＣ区、中央部をＢ区とした。

確認調査の結果により調査区を設定、表土及びⅡ層まで重機による掘削を行い、Ⅲ層のアカホヤ火山灰層上面で遺構検出を行う計画だったが、アカホヤ火山灰層の残存状況が良くなかったことと、風倒木や耕作による攪乱のためにアカホヤ火山灰層上面での遺構検出が困難であった。そこで、アカホヤ火山灰層までを重機で掘削することとし、遺構検出はⅣ層上面で行った。またそれより下層の調査については、トレンチによる包含層の有無と広がりを確認しながら、その結果に基づき、土層観察用のベルトを残した状態で掘り下げ、遺構・遺物が確認された時点で周辺に拡張する方法をとった。

検出された遺構については、半裁・埋土状況を確認後、必要に応じて土層図の作成・写真撮影を行いながら掘り下げを行った。遺構実測は基本的には、集石遺構・土坑は縮尺10分の１、土層断面図については10分の１もしくは20分の１での図化を行った。

また包含層出土遺物については、基本的に個々に番号を付し、トータルステーションを用いた３次元測量を行い、遺物分布図の作成のためのデータを記録した後、取り上げを行った。

冬の調査は寒風と日照時間の短さに悩まされながらの作業であった。１月５日より重機による表土掘削を開始したが、調査区への重機の進入路が急傾斜であり、事前に整備が行われていたものの再度傾斜を調整しながらの進入となった。また、調査区は直前まで栗が栽培されていた関係で切り株が多く残り、掘削にはかなりの時間を要した。調査を開始すると１月下旬にはＡ区から集石遺構や土坑が検出され始めた。Ⅳ層からは黒色磨研土器や孔列文土器の小片が出土し、赤化した砂岩の礫が検出された。そこで、集石遺構の存在が確実なＡ区を重点的に掘り下げることとした。

２月には調査区の旧地形が南から北へ傾斜していることが分かったため、調査区北側のトレンチを複数箇所掘り下げ、下層の堆積状況を確認し、Ａ区とＢ区の境界付近に調査区を横断するトレンチを設定（第２トレンチ）し、傾斜を確認した。２月８・９日には北方中学校の１・２年生が見学に来た。２月22日に空撮を行った。その後２月下旬にＣ区で散礫と集石遺構を検出した。また、第２トレンチを拡幅し掘り下げた。

３月に入り遺構の検出、実測等の記録が終わり、下層の堆積と旧地形の確認を行った。調査区西側及びＢ区とＣ区の境界付近に調査区を横断するトレンチ、Ｃ区北東部に十字ベルトを残してトレンチを設定したが、旧石器時代の遺物は確認できなかった。３月19日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

第２節　基本層序

本調査区は丘陵状の地形の頂上部から北に傾斜する斜面に位置する。調査直前まで栗林であったため、樹根や風倒木の跡と思われる攪乱が多かった。旧北方町発行の 2500 分の１現況図をみると土地利用は荒れ地となっているが、ゴボウやイモを栽培した時期もあり、継続的に畑地として利用されてきたようである。削平は調査区全体に及び、Ⅱ～Ⅲ層は調査区の大部分で消失している。そのような状況に於いて、調査区北側の壁は比較的Ⅰ層～Ⅲ層の残存状況が良かったため、これを基本土層とした。本遺跡の層序は第３図のとおりである。Ⅲ層に鍵層となるアカホヤ火山灰層（約 7,300 年前[1]）が確認されている。下層確認のため部分的に掘り下げてみたがＡＴ層は確認できなかった。遺物包含層は、Ⅳ層上部～下部近くが縄文時代早期の包含層で、集石遺構等の遺構が確認されている。以下、層ごとに述べる。

Ⅰ　層…表土もしくは耕作土。

Ⅱ　層…黒色もしくは茶褐色土層。部分的にⅢ層のアカホヤ火山灰層をブロックで含む。

Ⅲ　層…アカホヤ火山灰層。明黄褐色を呈する。細砂が混じる。

Ⅳａ層…褐灰色土層。しまりが弱く、細砂が混じる。角閃石など φ1mm 程度の鉱物粒を含む。

Ⅳｂ層…灰黄褐色土層。しまりが弱く、細砂が混じる。角閃石など φ1mm 程度の鉱物粒を含む。

Ⅴ　層…にぶい黄橙色土層。ローム層で微砂が混じる。

Ⅵ　層…にぶい黄橙色土層。ローム層で微砂が混じる。褐灰色シルトを 30％ブロック状に含む。

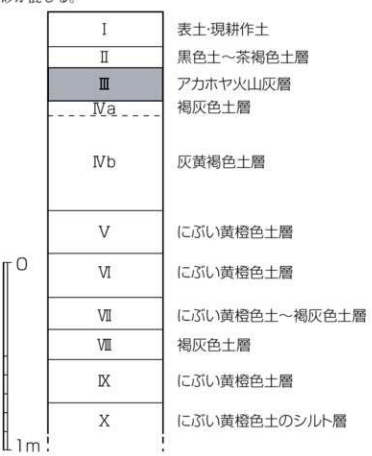
Ⅶ　層…にぶい黄橙色土と褐灰色土が同率に混ざった細砂混じりの土層。かたくしまる。白色礫を多く含む。

Ⅷ　層…褐灰色土層。にぶい黄橙色土を 10％ブロック状に含む。φ 1 ～ 5 cm の礫を含む。かたくしまる。

Ⅸ　層…にぶい黄橙色土層。褐灰色土を 20％ブロック状に含む。かたくしまる。

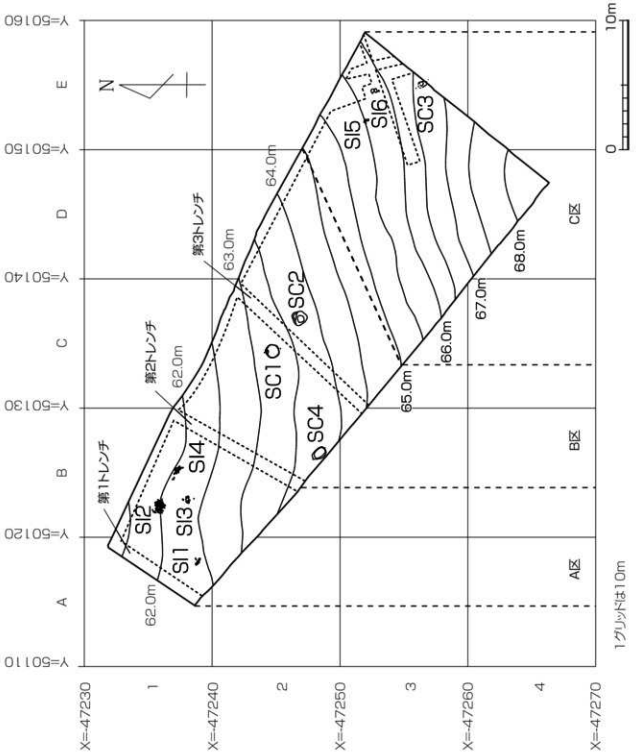
Ⅹ　層…にぶい黄橙色のシルト層。砂礫を多く含む。

1）年代は『新編　火山灰アトラス－日本列島とその周辺』（町田洋・新井房夫　2003）による。



第３図　基本層序図

第4図　周辺地形図(S=1／5,000)



第5図　遺構配置図(S=1／300)

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　縄文時代の遺構と遺物

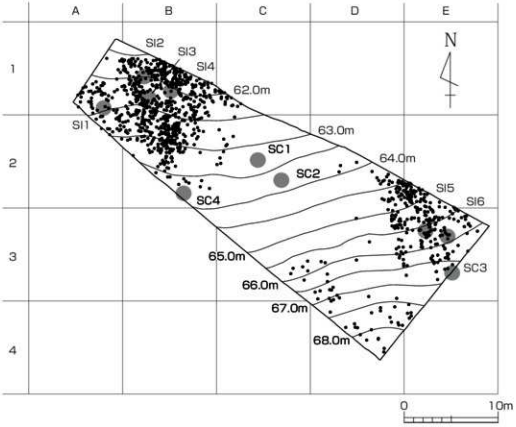
１　遺構（第６図～第９図）

遺構は集石遺構６基、土坑４基が確認されている。遺構は主にⅣ層下面にて確認した。

（１）散礫（第６図）

調査区全体で、おおまかに２cm× ２cm 以上の大きさ以上の礫を点上げしたところ約 1,300 点になった。礫はⅣ層上位から下位近くまで出土し、その分布は大きく２群に分けられる。１つはＡ区のＢ１グリッドの２～４号集石遺構を中心とする区域、もう一つはＣ区のＤ２・３～Ｅ２・３グリッドにまたがる、５・６号集石遺構を中心とする区域である。前者の散礫は２～４号集石遺構を中心にやや斜面の上に向かって広がるのに対し、後者は５～６号集石遺構を中心に斜面の下の方へ広がるという違いがみられた。散礫は集石遺構に用いられた礫が被熱し割れたものを取り除いたものと考えられる。後世の削平等の影響を考慮すると散礫はさらに広範囲にわたるものであったと予想される。

散礫の石材は砂岩が圧倒的に多数を占め、ホルンフェルス、熔結凝灰岩、チャート、流紋岩、頁岩等もみられる。多くは被熱し赤化して割れていた。熔結凝灰岩は集石遺構の配石として多く用いられたものが被熱し割れて取り除かれたものと考えられる。一方、頁岩は被熱していないものが多い。



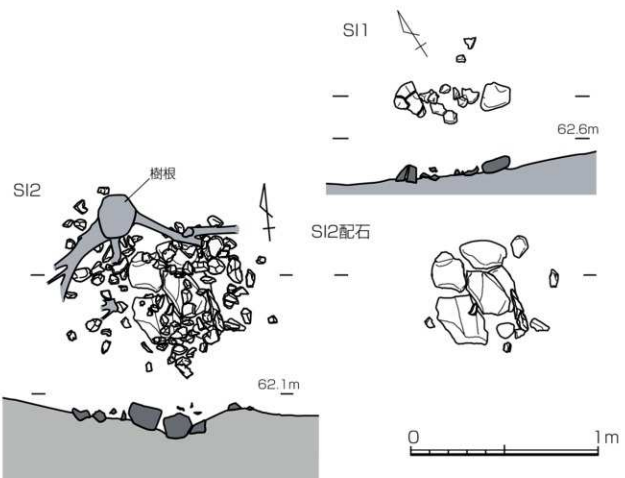
第６図　散礫分布図（Ｓ＝１／４００）

（2）集石遺構（ＳＩ）（第７図～第８図、第３表）

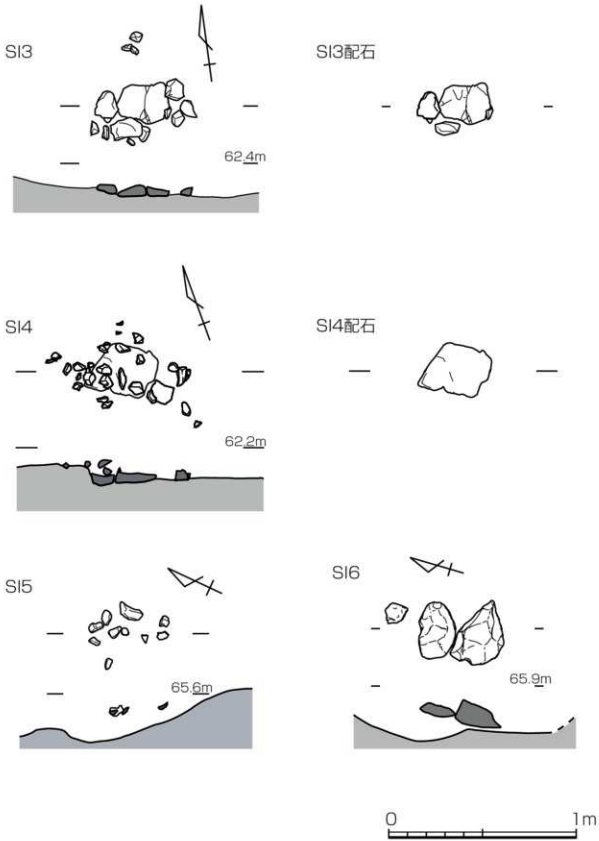
今回の調査では集石遺構６基が確認されている。その分布は調査区西側Ａ区、Ａ１～Ｂ１グリッドの標高62～62.5 mに分布するもの（ＳＩ１～４）と東側の尾根の頂上付近Ｃ区、Ｅ３グリッドの標高65.5～66 m付近に分布するもの（ＳＩ５、６）の２群に分けられる。前者については、ＳＩ２～４がまとまって検出されており、この一群から４m程離れたところにＳＩ１が分布する。ＳＩ２～４には板状の熔結凝灰岩が配置されている。配石として用いられている熔結凝灰岩は被熱と風化で非常にもろく、取り

第３表　集石遺構観察表

挿図番号	遺構番号	層位	調査区（グリッド）	配石の有無	出土遺物	礫の範囲	掘り込み規模	礫総個数	礫の密度	炭化物の有無	備考
						長さ×幅（m）	長さ×幅×深さ（m）				
1	ＳＩ１	Ⅳ層	Ａ区（Ａ１）	無	無	0.7×0.4	無	12	疎	無	
2	ＳＩ２	Ⅳ層	Ａ区（Ｂ１）	有	無	1.2×1.0	無	111	密	無	
3	ＳＩ３	Ⅳ層	Ａ区（Ｂ１）	有	無	0.6×0.4	無	14	疎	無	
4	ＳＩ４	Ⅳ層	Ａ区（Ｂ１）	有	無	0.7×0.4	無	29	疎	無	
5	ＳＩ５	Ⅳ層	Ｃ区（Ｅ３）	無	無	0.5×0.3	無	10	疎	無	
6	ＳＩ６	Ⅳ層	Ｃ区（Ｅ３）	無	無	0.7×0.4	無	3	疎	無	



第７図　集石遺構（ＳＩ）実測図１（Ｓ＝１／２０）



第８図　集石遺構（ＳＩ）実測図２（Ｓ＝１／２０）

外す際にぼろぼろ崩れてしまう状態だった。30 ～ 40cm 大のものは本来もう少し大きかったと思われる。ＳＩ５、６には熔結凝灰岩の配石がみられなかった。ＳＩ６には 30 ～ 40cm 大の砂岩が用いられており、他の集石遺構とは性格の違うものであった可能性がある。ＳＩ５、６の２基間の距離は約２ｍである。Ｂ区からは集石遺構が検出されなかった。Ｂ区では土坑が３基検出されており、土坑の役割は不明であるが、集石遺構と土坑を区別して設置していたと考えられる。集石遺構は全て同じⅣ層下面で確認されており同時期に構築されている。掘り込みはいずれにも確認できなかった。

１号集石遺構（ＳＩ１）

Ａ区Ａ１グリッドⅣ層で検出された集石遺構で、0.7×0.4 ｍの楕円形を呈する。破砕礫を挟むように両端に 20cm 台の砂岩が２個配置されており、そのうち一つは赤色化が著しい。総礫数は 12 個である。赤色化した礫は西側に集中している。掘り込みはみられず、埋土に焼けた痕跡や炭化物も確認できなかった。また、１号集石遺構だけが単体で検出され、２～４号集石遺構の集中区から４ｍ程離れている。このことから使用頻度は少なく単発的に使用されたもので、礫は再利用されたものと考えられる。あるいは２～４号集石遺構を利用したグループとは違う集団が利用していたと考えることも可能である。

２号集石遺構（ＳＩ２）

Ａ区Ｂ１グリッドⅣ層で検出された集石遺構で、1.2×1.0 ｍの範囲に総数 111 個の礫を検出した。今回の調査で検出された集石遺構の中では最も礫数が多く、規模も最大である。厚みのある板状の熔結凝灰岩が配石として用いられており、被熱による赤色化が著しい。上部の礫は密集しており、石材は１号と同じく砂岩の破砕礫が大多数を占めている。礫の密度は１号に比べて密である。樹根による破壊が著しく、掘り込みは確認できなかった。また、埋土に焼けた痕跡や炭化物も確認できなかった。

３号集石遺構（ＳＩ３）

Ａ区Ｂ１グリッドⅣ層で検出された集石遺構で、0.6×0.4 ｍの楕円形を呈する。２号集石と同様 30cm 大の熔結凝灰岩の配石を持つが、厚みがない板状のものである。上部の礫は砂岩の破砕礫が多いが、検出時点ですでに大部分が失われているものと考えられ、他の集石に比べて破砕礫の数が少なかった。樹根により破壊されており、掘り込みは確認できず、焼土跡や炭化物は確認できなかった。

４号集石遺構（ＳＩ４）

Ａ区Ｂ１グリッドⅣ層で検出された集石遺構で、0.7×0.4 ｍの楕円形を呈する。２・３号集石と同様 40cm 大の熔結凝灰岩の配石を持つ。配石は３号集石と同様、厚みのない板状のものであった。上部の礫はほとんどが砂岩の破砕礫で、数が少ない。風倒木による攪乱部分から検出されており、掘り込みは確認できなかった。また、焼土や炭化物は確認できなかった。

５号集石遺構（ＳＩ５）

Ｃ区Ｅ３グリッドⅣ層で検出された集石遺構で、0.5×0.3 ｍの範囲に 10 個の礫がまばらに検出された。６号集石に近接しており、６号集石を構成する礫が非常に少ないことから６号集石から取り除かれた礫が再利用されたものとも考えられる。掘り込み、炭化物、焼土粒ともに確認できなかった。

６号集石遺構（ＳＩ６）

Ｃ区Ｅ３グリッドⅣ層で検出された集石遺構で、0.7×0.4 ｍの範囲に 30 ～ 40cm 大のやや扁平な礫が二つ、拳大の礫が一つ検出された。石材は砂岩である。掘り込みは確認できなかったが焼土粒がみられた。

（3）土坑（ＳＣ）（第９図、第４表）

今回の調査では土坑が４基確認されている。いずれもⅣ層下面で検出した。調査は、まず土坑の輪郭を明確にし、半裁して底部や立ち上がりを確認し、埋土を観察して完掘を行った。平面及び断面の写真撮影・実測は、遺構の調査状況に合わせて段階的に行った。土坑の形態はいずれも円形～楕円形を呈する。遺構内出土遺物はほとんどみられず、わずかにＳＣ３に被熱した破砕礫がみられた。

配置上の特色として散礫も集石遺構も検出されなかったＢ区から３基検出されたことが上げられる。４基のうち３基から焼土粒が検出されているが、土坑の性格は不明である。Ｃ区では集石遺構が検出されており、ＣＳ３の目的は他の土坑と異なると考えられる。

ＳＣ１・２・４はＢ区の標高 64 ～ 65 mに分布する。ＳＣ１・２は近接し、２mほどの距離である。ＳＣ４はこの２つから７mほど離れている。ＳＣ３は東側の尾根の頂上付近の標高 66.5 m付近に分布する。ＳＣ１・２とＡ区の集石遺構群の距離は７mほどである。ＳＣ３は尾根の頂上部に配置されており、底部の焼土粒の含まれる範囲も広く厚いことから利用度が高かったと考えられる。ＳＣ３はＳＩ５・６に近接し、その距離はＳＩ５との距離が４m、ＳＩ６との距離が３mである。ＳＣ３は集石遺構や散礫の分布する中に位置することから、他の３基とは目的が異なる土坑ではないかと考えられる。埋土の暗褐色細砂層は熔結凝灰岩が風化したものであるとすれば、ＳＩ５・６等近接する集石遺構で配石として用いられたものが破砕したのち取り去られ捨てられたと考えられる。

１号土坑（ＳＣ１）

Ｂ区Ｃ２グリッドⅣ層で検出された土坑で、0.53×0.52 mの円形を呈する。底面の中心部は６cm と非常に浅い。北端部に 15cm 程の柱穴を有する。焼土や炭化物は確認できなかった。

２号土坑（ＳＣ２）

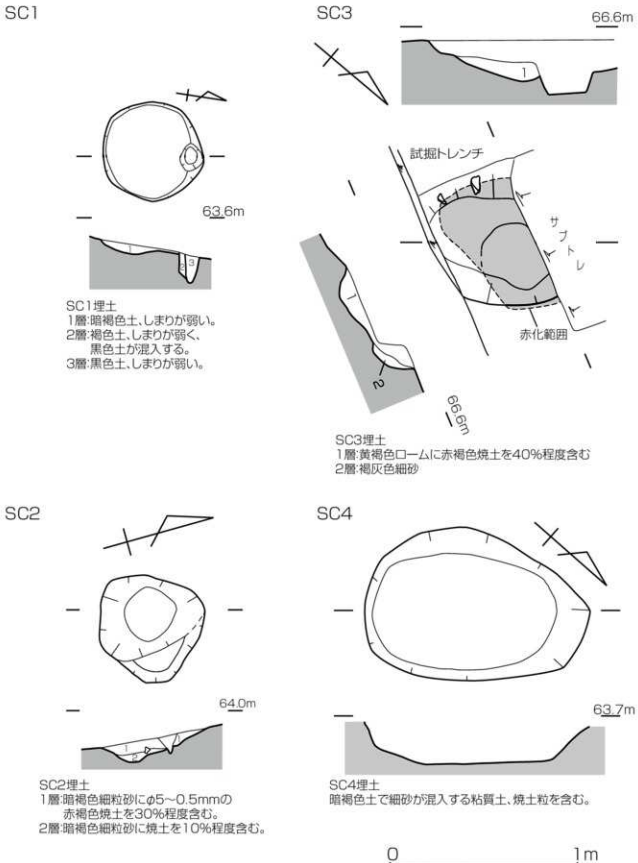
Ｂ区Ｃ２グリッドⅣ層で検出された土坑で、0.55×0.60 mの楕円形を呈する。土坑の開口部が北の方へラッパ状に広がる。近接する１号土坑の北端部にみられるような柱穴はない。深さは 10cm で埋土は２層に分層でき、上部で 30%、下部で 10%程度の焼土粒の混入がみられた。

３号土坑（ＳＣ３）

Ｃ区Ｅ３グリッドⅣ層で検出された土坑である。深さは 12cm 程度で底部近くから比熱した礫が検出された。埋土は２層に分層できた。北端部にみられる褐灰細砂層は熔結凝灰岩の風化したものではない

第４表　土坑観察表

挿図番号	遺構番号	層位	調査区（グリッド）	規模 長軸 × 短軸（m）	深さ（m）	床面積（㎡）	焼土粒の有無	出土遺物	備考
1	ＳＣ１	Ⅳ層	Ｂ区（Ｃ２）	0.53×0.52	0.06	0.19	無	無	円形プランを呈する
2	ＳＣ２	Ⅳ層	Ｂ区（Ｃ２）	0.55×0.60	0.1	0.06	無	無	楕円形プランを呈する
3	ＳＣ３	Ⅳ層	Ｃ区（Ｅ３）	—	0.12	—	有	無	トレンチにより削平され形状不明
4	ＳＣ４	Ⅳ層	Ｂ区（Ｂ２）	1.18×0.81	0.21	0.47	有	無	楕円形プランを呈する



第９図　土坑（ＳＣ）実測図（Ｓ＝１／２０）

かと思われる。黄褐色ロームの中に40％程度の赤褐色焼土を含む。

４号土坑（ＳＣ４）

Ｂ区Ｂ２グリッドⅣ層で検出された土坑である。1.18×0.81 mの楕円形を呈する。深さは21cmで埋土は単層である。埋土中に暗褐色細砂が混じり、焼土粒を含む。

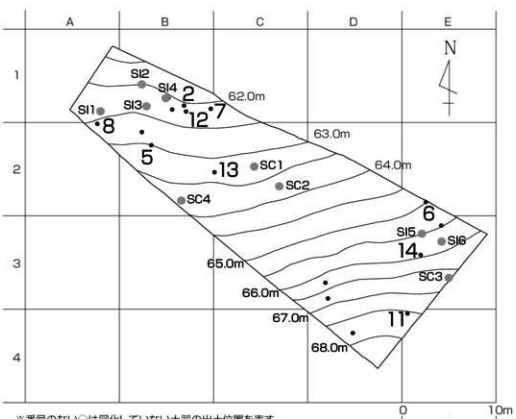
２　遺物（第１０～１４図、第５～６表）

（２）土器（第１１図１～１３）

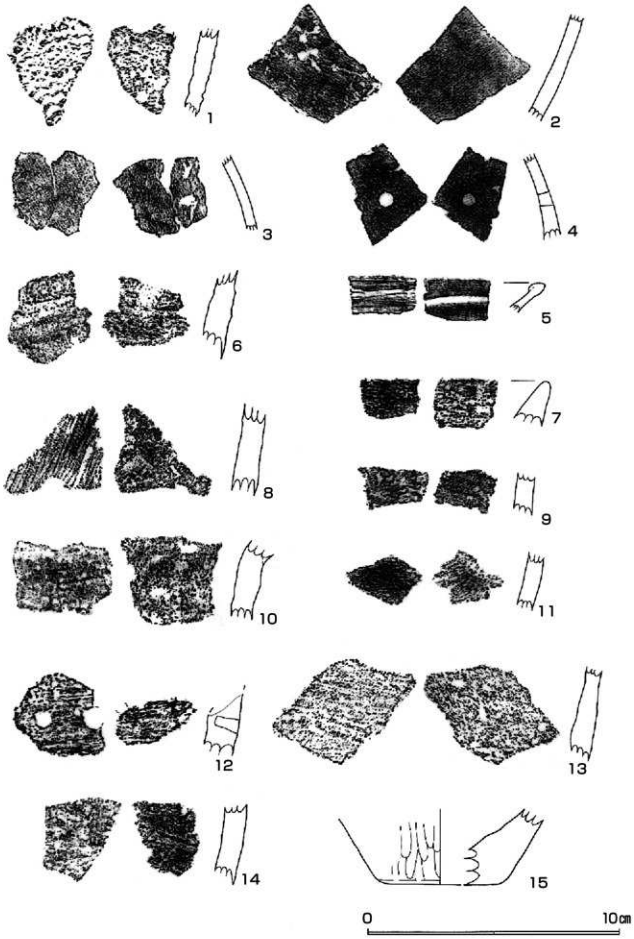
遺物の出土数は少なく、特に土器は小片のみで型式の判別が困難であった。縄文時代早期の遺物包含層はアカホヤ火山灰層下のⅣ層である。縄文時代の土器は１３点出土している。いずれも小片で接合できるものがなかった。それらは縄文時代早期、縄文時代後～晩期、時期を特定できない粗製の土器に大別できる。縄文時代早期の土器は試掘の際に１点のみ出土しただけで本調査では出土しなかった。１がそれであり山形押型文土器に属するものである。Ⅳ層上面から出土している。出土地点は今回の調査でのＥ３グリッドに該当し、尾根の頂上部にあたる。

１は山形押型文土器である。試掘の際にⅣ層上面から出土している。出土地点は今回の調査でのＥ３グリッドに該当し、尾根の頂上部にあたる。

２～５は縄文時代後～晩期の精製磨研土器である。２は黒色磨研土器で胎土に金雲母を含む。浅鉢の胴部である。Ｂ１グリッドＳＩ４付近から出土している。３は内外ともににぶい赤褐色を呈するが部分



第１０図　土器出土位置図（Ｓ＝１／４００）



第11図　土器実測図(S＝2／3)

第５表　土器観察表

図面番号	種別	器種部位	出土地点	層位	手法・調整・文様ほか		焼成	色	調	胎土の特徴	備考
					外面	内面		外面	内面		
1	縄文土器	深鉢胴部	一括	Ⅳ	山形押型文	横方向のナデ	良好	にぶい橙色	橙色	2mm 以下の黄褐色粒、微細な褐色粒を含む。	試掘トレンチから出土
2	縄文土器	浅鉢胴部	Ｂ１	Ⅳ	ミガキ	ミガキ	良好	黒色	黒色	2mm 以下の白色粒、1mm 以下の金雲母粒・褐色粒、微細な白色光沢粒含む。	黒色磨研土器
3	縄文土器	浅鉢	一括	Ⅳ	ミガキ	ミガキ	良好	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	微細な黄褐色粒・光沢粒を含む。	外面・内面ともに部分的に墨斑あり
4	縄文土器	浅鉢	一括	Ⅰ	ミガキ、穿孔	ミガキ、穿孔	良好	赤褐色	にぶい赤褐色	1mm 以下の褐色粒、微細な黄褐色粒・黒色粒を含む。	試掘トレンチから出土
5	縄文土器	浅鉢口縁部～胴部	Ｂ２	Ⅳ	横方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	赤褐色	暗赤褐色	微細な褐色粒・黄褐色・光沢粒を含む。	入佐式～黒川式
6	縄文土器	深鉢胴部	Ｅ２	Ⅳ	ナデ、斜め方向の押圧文	横方向の貝殻条痕文	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	4mm 大の灰白色粒、2mm 以下の黒色角柱光沢粒、0.5mm 以下の黄褐色粒、黒色光沢粒を含む。	
7	縄文土器	深鉢口縁部	Ｂ１	Ⅳ	横方向のナデ	斜め方向の貝殻条痕文	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	1mm 以下の褐色粒・光沢粒、微細な黄褐色の粒を含む。	
8	縄文土器	深鉢胴部	Ａ２	Ⅳ	斜め方向の条痕文	斜め方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	3mm 大の灰白色粒、1mm 以下の黒色光沢粒・無色光沢粒、微細な黄褐色粒を含む。	
9	縄文土器	深鉢胴部	一括	Ⅳ	横方向の貝殻条痕文	横方向の貝殻条痕文	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	3mm 以下の褐色粒、1mm 以下の黒色粒・光沢粒を含む。	
10	縄文土器	深鉢頸部	一括	Ⅳ	貝殻条痕文、縦方向のナデ	横方向のナデ	良好	にぶい橙色	橙色	5mm ～ 1mm 大の赤褐色粒、2mm 以下の白色粒、2mm 以下の黒色光沢粒を含む。	
11	縄文土器	深鉢胴部	Ｅ４	Ⅳ	横方向の貝殻条痕文	斜め方向の貝殻条痕文	良好	にぶい黄褐色	にぶい褐色	3mm 以下の黄褐色粒、1mm 以下の黒色光沢粒含む。	
12	縄文土器	深鉢胴部	Ｂ１	Ⅳ	横方向の貝殻条痕文、棒状工具による連続刺突（一部貫通）	横方向のナデ	良好	にぶい黄褐色	灰黄褐色	3mm 以下の灰色粒、1mm 以下の光沢粒・褐色粒、微細な白色粒を含む。	孔列文土器
13	縄文土器	深鉢胴部	Ｂ２	Ⅳ	横方向の貝殻条痕文	横方向のナデ、横方向の貝殻条痕文	良好	明赤褐色	にぶい黄橙色	4mm 以下の黒色角柱光沢粒、3mm 以下の赤褐色粒、1.5mm 以下の黄褐色粒、1mm 以下の白色純光沢粒を含む。	
14	弥生土器	不明	Ｅ３	Ⅳ	ナデ全体に風化	工具ナデ全体に風化	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	4mm 以下の白色粒・高師小石、1mm 以下の光沢粒・黒色粒を含む。	
15	弥生土器	底部～胴部	一括	Ⅳ	タテ方向のミガキ、底部はナデ、凹み有り	風化著しく、調整不明	良好	橙色	橙色	4mm ～ 1mm 大の褐色粒、2mm 以下の赤褐色粒を含む。	試掘トレンチから出土

的に黒変している。４は試掘の際にアカホヤ火山灰層上面で検出されていることから耕作の影響を受けていると思われる。穿孔がみられるが補修孔かどうかは不明である。５は浅鉢の口縁部である。出土位置はＡ区Ｂ２グリッドである。外は赤褐色、内は暗赤褐色を呈する。両面とも丁寧に磨かれている。

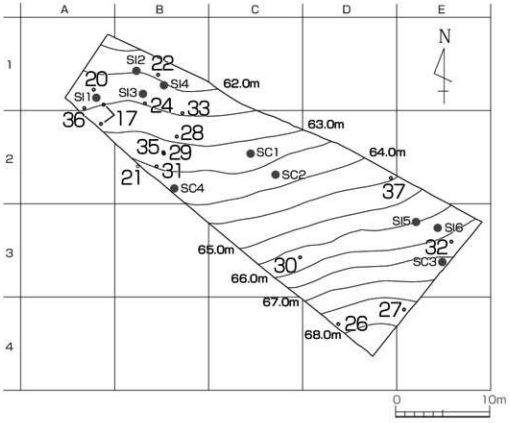
６～１３は粗製の土器である。６は深鉢の胴部である。外面・内面ともに調整はナデでにぶい橙色を

呈する。出土位置はＣ区Ｅ２グリッドで、調査区の北側の壁際である。７は浅鉢の口縁部と思われる。外面・内面ともににぶい黄褐色を呈する。調整はナデである。出土位置はＢ１グリッドでＡ区とＢ区の境界付近である。８は深鉢の胴部である。外面はにぶい黄褐色、内面はにぶい褐色を呈する。調整はナデである。９は深鉢の胴部である。外面・内面ともに貝殻条痕文が施され、にぶい黄褐色を呈する。10は深鉢の頸部である。貝殻条痕文が施されている。外面内面ともににぶい黄褐色を呈する。11は深鉢の胴部である。外面はにぶい橙色､内面は橙色を呈する。貝殻条痕文がみられる。出土位置はＣ区Ｅ４グリッドである。12は孔列文土器である。外面はにぶい黄橙色､内面は灰黄褐色を呈する。孔列は貫通しないが、内面がこぶ状に突出する。縄文時代晩期中葉に属する。出土位置はＡ区Ｂ１グリッドである。13は深鉢の胴部である。外面は明赤褐色、内面はにぶい黄橙色を呈する。貝殻条痕文がみられる。出土位置はＢ区Ｂ２グリッドである。

（３）石器（第１３図１６～２２、第１４図２３～３７）

石器はその可能性のあるものを含め22点を抽出して図化した。出土位置の特徴としてはＡ・Ｃ区で出土しておりＢ区では出土しなかったこと、Ａ・Ｂ区の境界付近でチャート製の剥片が多く確認されたことがあげられる。被熱して赤色化したものは集石遺構の石材として利用されたものと考えられる。石器組成は砂岩のほかホルンフェルスや頁岩、チャートがみられた。

16は敲石の可能性がある礫である。砂岩製で下端を中心に敲打痕が残る。17は敲石として使用された可能性があるが明確な敲打痕があるとはいえないため礫として報告する。石材は頁岩である。18は砂

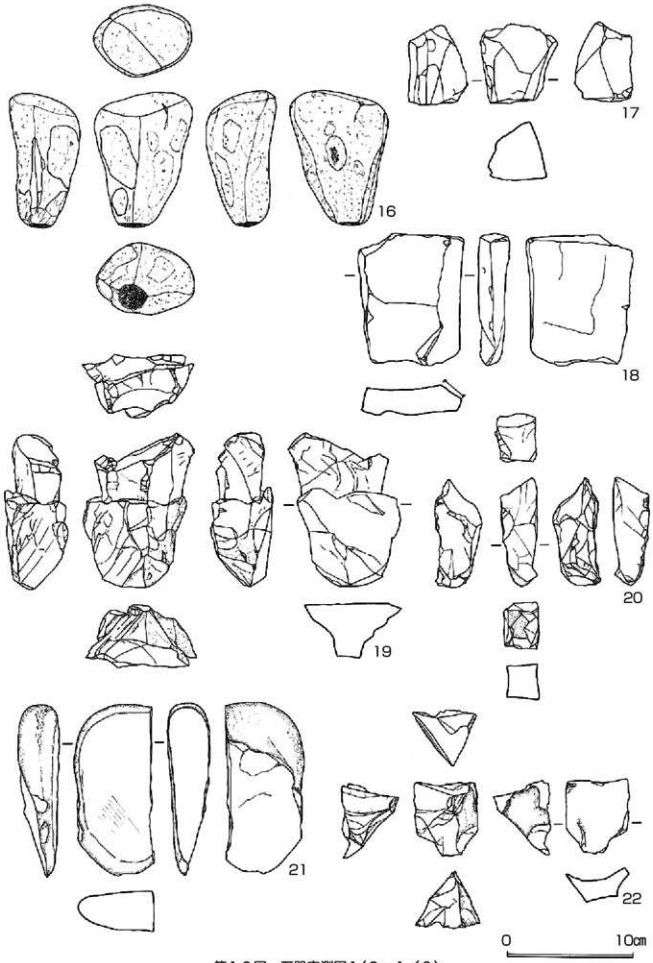


第１２図　石器出土位置図（Ｓ＝１／４００）

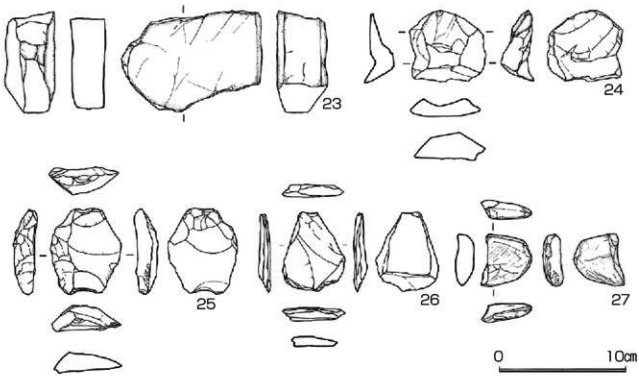
岩製の砥石である。全体に赤化しており被熱して破砕している。19・20は石器として用いられた可能性のある礫である。石材は泥岩を源岩とするホルンフェルスである。19は大きな礫の破片と思われ、大きく凹む面を持つ。20は破砕しており用途は不明である。21は砂岩の礫である。A区B２グリッドから出土した。被熱し赤化した後破砕している。22は石核の可能性のある礫である。石材は砂岩を源岩とするホルンフェルスである。B１グリッドＳＩ４付近から出土している。23は台石の可能性のある礫である。石材は砂岩で、上面がわずかに凹む。自然礫をそのまま利用したものであり、敲打形成して形状を整えたものではない。やや赤化しており、割れた後に被熱したと思われる。24・25は泥岩源のホルンフェルス製の剥片である。24はA区B１グリッドのＳＩ３付近から出土している。26は石斧の可能性のある礫

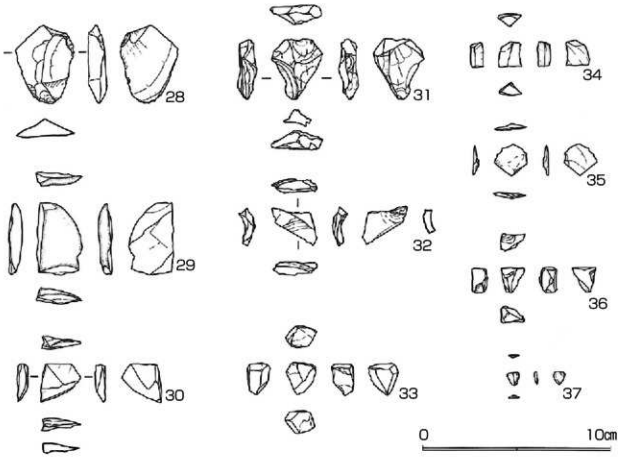
第６表　石器観察表

挿図番号	器　種	注記番号	出土地点	層位	計測値				石　材	備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
16	敲石の可能性のある礫	ミナミクボ35	A区一括	Ⅳ	10.75	7.8	5.7	446.2	砂岩	
17	礫	ミナミクボ1198	A区A２	Ⅳ	5.3	5.6	4.6	208.9	ホルンフェルス	接合資料
17		ミナミクボ1226	A区A１	Ⅳ						
18	砥石	ミナミクボ	一括	Ⅳ	10.4	8.45	2.3	311.7	砂岩	
19	礫	ミナミクボ774	A区一括	Ⅳ	12.2	8.2	5.0	396.2	ホルンフェルス	接合資料
19		ミナミクボ978		Ⅳ						
20	礫	ミナミクボ658	A区A１	Ⅳ	8.6	2.95	3.7	105.3	ホルンフェルス	
21	礫	ミナミクボ1239	A区B２	Ⅳ	13.65	6.4	3.2	384.9	砂岩	
22	石核の可能性のある礫	ミナミクボ1175	A区B１	Ⅳ	5.9	5.1	4.5	85.4	ホルンフェルス	
23	台石の可能性のある礫	ミナミクボ908	C区一括	Ⅳ	11.02	8.0	4.05	450.5	砂岩	
24	剥片	ミナミクボ359	A区B１	Ⅳ	5.75	6.1	2.2	73.6	ホルンフェルス	
25	剥片	ミナミクボ584	一括	Ⅳ	6.35	5.8	2.0	57.3	ホルンフェルス	
26	石斧の可能性のある礫	ミナミクボ729	C区D４	Ⅳ	6.3	5.0	0.9	32.1	砂岩	
27	礫	ミナミクボ754	C区E４	Ⅳ	4.2	4.05	1.6	28.8	緑色岩	
28	剥片	ミナミクボ1219	A区B２	Ⅳ	4.1	3.1	0.9	10.9	流紋岩	
29	剥片	ミナミクボ1237	A区B２	Ⅳ	3.8	2.4	0.7	6.71	頁岩	
30	剥片	ミナミクボ710	C区C３	Ⅳ	2.0	2.1	0.6	1.9	流紋岩	
31	剥片	ミナミクボ1236	A区B２	Ⅳ	3.3	2.5	0.9	6.67	チャート	
32	剥片	ミナミクボ449	C区E３	Ⅳ	2.0	2.4	0.7	1.93	チャート	
33	石核の可能性のある礫	ミナミクボ1197	A区B２	Ⅳ	1.7	1.6	1.2	2.8	チャート	
34	剥片	ミナミクボ一括	C区一括	Ⅳ	1.35	1.25	0.7	1.0	チャート	
35	剥片	ミナミクボ1238	A区B２	Ⅳ	1.65	1.75	0.3	0.6	チャート	
36	石核	ミナミクボ30	A区A１	Ⅳ	1.4	1.3	0.85	1.6	チャート	
37	チップ（砕片）	ミナミクボ652	C区D２	Ⅳ	0.7	0.65	0.2	0.06	チャート	



第１３図　石器実測図１（S＝１／３）





第１４図　石器実測図２（S＝１／３、１／２）

である。石材は砂岩である。C区D４グリッドで出土した。27は緑色凝灰岩の小円礫で半分欠損しており側面に擦痕がある。しかしながら明確な使用痕と断定できないため礫として報告する。出土位置はC区E４グリッドである。28は流紋岩の剥片である。B２グリッド、A・B区の境界付近で出土している。29は頁岩の剥片である。B２グリッド、A・B区の境界付近から出土している。30は流紋岩の剥片である。C区C３グリッドより出土している。31～37はチャート製の石器等である。31・32・34・35は剥片である。31･35はB２グリッド内、A区とB区の境界付近で出土した。32･34はC区で出土した。33は石核の可能性のある礫である。A区､集石遺構に近接するB１・B２グリッドの境界付近で出土した。34はチャート製の剥片である。C区、調査区北東部のトレンチから出土している。36はチャート製の石核である。A１グリッド、SI１付近で出土している。37はチャート製のチップ（砕片）である。C区D２グリッドより出土している。

第２節　その他の時代の遺物（第１１図１４～１５、第５表）

弥生時代以降の土器の小片が表土及びⅡ層中から採集されている。土器片は耕作の影響を受け小片となったものが多い。造成土に伴って運び込まれたものも多いと考えられる。弥生土器のうち図化可能なものは２点であった。14は焼成良好で角閃石などの鉱物を多く含む。器種は不明だが胴部であろう。SC３から西に３mの場所で出土しているが遺構との関係は不明である。C区E３グリッドで出土している。15は甕の底部である。焼成良好で外面に縦方向のミガキがみられる。このほかに弥生時代以降の土器の小片が８点出土しており、これらは器種・部位とも特定できない図化不能な小片であった。８点のうち３点はA区から、４点はC区から出土している。いずれも遺構との関係は不明である。

第Ⅳ章　総括

南久保山小堀町遺跡は、五ヶ瀬川の左岸に発達した標高約 70 mの丘陵とその北側裾に張り付くような谷からなる遺跡で、過去の調査では旧石器時代から中世までの遺構や遺物が確認されている。今回の調査では主にアカホヤ火山灰層下のⅣ層において縄文時代の遺構・遺物が確認された。ここでは遺物・遺構に若干の検討をくわえ、遺跡の位置付け、調査の成果や課題についてまとめる。

縄文時代早期の調査では、アカホヤ直下のⅣ層で破砕礫が散在する中で、６基の集石遺構と４基の土坑が検出された。今回の調査では住居跡は確認できなかったが、狭い範囲に集石遺構が集中することから、付近に住居があった可能性が考えられる。

土器については縄文時代早期の山形押型文土器が試掘調査の際に頂上部Ⅳ層上面から出土しているが、今回の調査では出土しなかった。最も比率が高いのは縄文時代後期～晩期頃のものと思われる精製の磨研土器だが、遺物の量が少なくデータとしては不十分なものである。今後の発掘調査の成果を待ちたい。５の精製浅鉢と 12 の孔列文を施す深鉢は、松添式と呼ばれる晩期中葉のセットを成す可能性があるが、５の口縁端部にはわずかな立ち上がりが認められ、やや古相を示すものかも知れない。

集石遺構については、配石を有する場合には石材に板状の凝灰岩が用いられているのが特徴的である。凝灰岩は軽量で加工が容易であることから好んで利用されたものと考えられる。五ヶ瀬川下流の今井野第２遺跡や吉野第２遺跡でも板状の凝灰岩が配石に利用される例が多く、五ヶ瀬川流域の地域的な特徴といえる。配石以外の礫の石材はほとんど砂岩である。いずれの集石遺構にも埋土中に炭化物や焼土は確認できなかった。

礫の採取地は曽木川と考えられる。調査区の北の谷を谷筋に沿って北東方向に進むと曽木川に出る。距離・地形的に往来が容易である。五ヶ瀬川の河岸に降りるには遠回りをするか崖を降りなければならず危険であり、往来は頻繁ではなかっただろう。熔結凝灰岩は丘陵の麓で入手できる。

五ヶ瀬川の中流、川水流地区で河原石を測定した結果、種類では砂岩が最も多く全体の４分の１、緑色岩と千枚岩を入れて全体の２分の１、チャート、珪質岩、花崗斑岩、阿蘇熔結凝灰岩までで全体の４分の３、あとは花崗岩、礫岩、頁岩、石灰岩、ホルンフェルス、縞状流紋岩、流紋岩、大理石、珪岩がみられる。曽木川では採取されなかった礫が五ヶ瀬川には存在する（青山　2002）。石材によっては五ヶ瀬川まで遠征したか、他地域との交流で入手したのであろう。

今回の調査では住居跡は確認できなかった。これまでの調査でも五ヶ瀬川の左岸では確認例が少ない。しかしながら集石遺構や土器の出土状況、五ヶ瀬川を横断することがそれほど容易なことではないと考えられることから、五ヶ瀬川の左岸にも住居を営んだことは間違いない。本遺跡については遺構の数に比して遺物の量が非常に少ないため、人々の滞在した時間が非常に短かった可能性が考えられる。

Ｃ区の南側に今回の調査区外で次年度以降に調査予定としていた箇所がある。今回の調査の終わり頃に県の文化財課が確認調査を行ったが、削平が大きく遺構も遺物も確認されなかった。Ａ・Ｂ区の南側は現在も畑地として利用されており、本来であればさらに多くの遺構があったと想像される。

報告書執筆中の現在、谷を挟んで北側に隣接する丘陵で十郎ヶ尾遺跡の調査を行っている。この調査の成果とあわせて当地域のかつての人々の暮らしを更に詳細に再現したいと考えている。

【参考文献】

北方町史編纂委員会 1972「北方町史」北方町

北方町史編纂委員会 1972「北方町史　第二巻」北方町

北方町教育委員会 1990「笠下遺跡」『北方町文化財報告書第 1 集』

北方町教育委員会 1992「南久保山小堀町遺跡」『北方町文化財報告書第 5 集』

北方町教育委員会 2004「町内遺跡詳細分布調査報告書」『北方町文化財報告書第 23 集』

北方町教育委員会 2006「北方町内遺跡 6」『北方町文化財報告書第 27 集』

田中茂 1962『東臼杵郡　北方村の古墳』北方村教育委員会

延岡市教育委員会 2010「東原遺跡（第 7 次）北久保山遺跡（第 2 次）」『延岡市文化財調査報告書第 41 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2005「山口遺跡第 2 地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 99 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「赤木遺跡第 8 地点（第二次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 145 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2007「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 146 集』

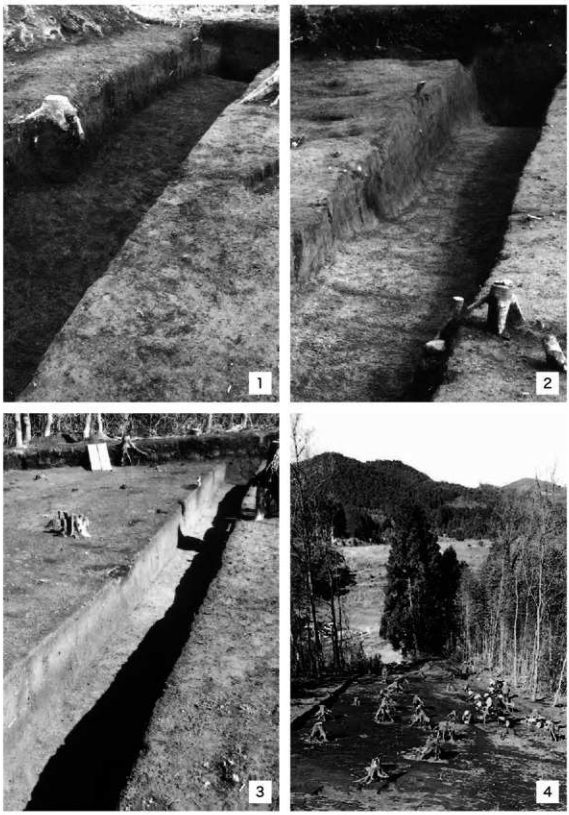
宮崎県埋蔵文化財センター 2007「吉野第 2 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 155 集』

宮崎県埋蔵文化財センター 2009「黒仁田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 181 集』

坂元守雄 編集・発行　2002「みやざきの自然 20 号」

写　真　図　版

図版1



1 第1トレンチ西壁土層断面　2 第2トレンチ西壁土層断面
3 第3トレンチ西壁土層断面　4 調査区全景　東より

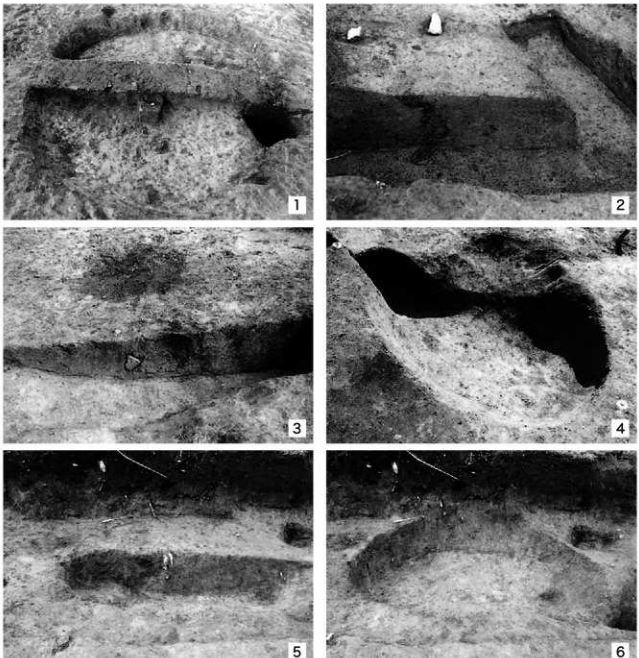
1　1号集石遺構　　2　2号集石遺構　　3　3号集石遺構

図版3

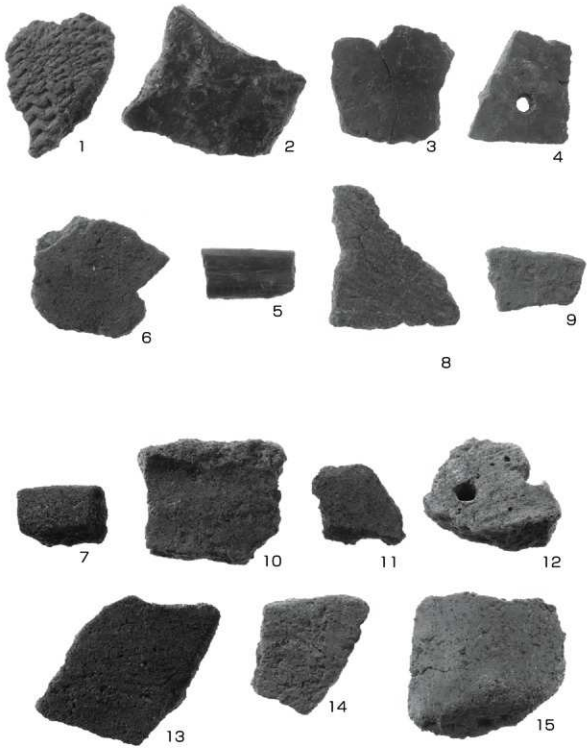
1　4号集石遺構　　2　5号集石遺構　　3　6号集石遺構

1　A区散礫検出状況　　2　C区散礫検出状況
3　A区散礫と集石遺構

図版5

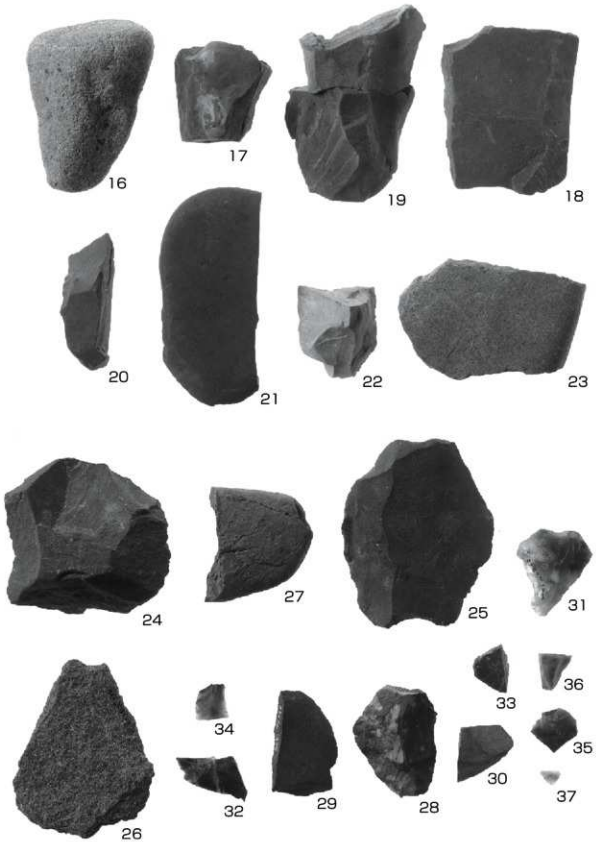


1　1号土坑断面　　2　3号土坑完掘　　3　2号土坑半裁
4　2号土坑完掘　　5　4号土坑半裁　　6　4号土坑完掘



出土土器

図版7



出土石器

報告書抄録

ふりがな	みなみくぼやまこぼりまちいせき
書　名	南久保山小堀町遺跡
副書名	一般国道２１８号北方延岡道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	7
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第２０６集
編著者名	川越　宏之
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地　TEL 0985-36-1171
発行年月日	2011 年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみくぼやまこぼりまち 南久保山小堀町 いせき 遺跡	みやざきけんのべおかし 宮崎県延岡市 きたかたまち 北方町子 ４３０１－１	45-426	0038	３２度 ３４分 ２２秒	１３１度 ３２分 ０３秒	20100105 ～ 20100319	600 ㎡	一般国道２１８号北方延岡道路工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南久保山 小堀町遺跡	集落	縄文時代	集石遺構　6基 土坑　4基	縄文土器、石器、 剥片、弥生土器	

要約	標高約 60 ～ 70 mの狭小な尾根の先端に立地する縄文時代の遺跡であり、集石遺構６基、土坑４基が検出された。住居跡は確認されなかった。 出土遺物は、縄文時代の押型文土器、貝殻条痕文土器、黒色磨研土器、剥片である。弥生時代の土器が表採されており、長期にわたるこの丘陵上での生活の痕跡をとどめている。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２０６集

南久保山小堀町遺跡

一般国道２１８号北方延岡道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

２０１１年３月２５日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212
宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地
電　話　0985(36)1171

印　刷　有限会社　宮崎新生社印刷
〒880-0124
宮崎市新名爪中牟田766番地
TEL 0985(39)6148　FAX 0985(39)4240